

Score

歌劇 幕臣・渋沢平九郎

M1 Act.1 Overture

Word by Kiyoshi SAKAI/Takakazu ISONO/
Noriaki SAITO/Atsuko KOYAMA

Music by Kohei NISHISHITA

Piccolo (Fl. 1)
 Flute 2
 Oboe 1
 English Horn (Ob. 2)
 Clarinet in B \flat 1, 2
 Fagotto 1, 2
 1, 2
 Percussion 1
 Snare Drum
 Bass Drum
 Triangle, Cymbal
 Percussion 2
 Horn 1
 Horn 2
 Soprano
 Mezzo-Soprano
 Violin
 Viola
 Cello
 Double Bass

フェイスブックの投稿では
 西下さんが1月29日に
 入籍されたそうです。

渋沢平九郎
 幕臣
 幕臣 渋沢平九郎
 幕臣 渋沢平九郎
 幕臣 渋沢平九郎

幕臣 渋沢平九郎
 幕臣 渋沢平九郎

埼玉 渋沢平九郎をオペラで上演
 渋沢唯一の妻子
 上演
 来年2月6日
 深谷市民文化会館

©2019-2020 K. SAKAI, T. ISONO, N. SAITO, A. KOYAMA
 & K. NISHISHITA All rights reserved.

が入った。予想されないわけではなかったが、まさかの事態である。当然3月25日に深谷市役所で予定していた記者会見も中止となり、ポツカリと大穴が空いてしまった。

突然公演ができなくなってしまった。どうしたものだろうか。そこへホールからありがたい提案をいただいた。代わりに翌年の2月6日に貸し出すから使ってくれとの話はなかった。1年ほど先のことになるが、これで新たな目標が決まった。

追いかけるように、**深谷市地域振興財団**が自主事業として扱っていただけることになり、また市役所内の**渋沢栄一政策推進部**も全面的なサポートを申し出てくれるなど地元の多大な協力で助けられた。そして、**渋沢栄一関連六社協定**でも積極的に取り上げるとの吉報も付いてきた。

正直なところ、個人的には本番の5月まで時間が足りないと思っていた矢先の出来事で、内心ラッキーと思う気持ちがないわけでもなかった。

3月から半年以上も中断していた練習をようやく9月末に再開することになった。しかし、フタを開けてみると合唱メンバーは半減していた。パートバランスも崩れ、演奏面でも厳しい状況に追い込まれた。そうはいえ、嘆いてばかりもいられない、何はともあれ残ったメンバーで続けるしかなかった。

演出も当初からは大きく変わらざるをえず、手探り状態の中で進められた。合唱指導と演出を兼務していた**磯野隆一**さんのご苦労は大変なものだったにちがいない。

また、オペラならではの課題として、合唱メンバーは、歌う以外にもいくつか演技をする場面がある。人数が減ったため一人が何役もこなさねばならなくなった。ソリスト陣も病気やその他の理由でキャストが変わるなか、感染対策のために舞台設定も大幅な変更を余儀なくされた。



演出大幅に変更 オーケストラは舞台の奥へ

人数が減ったことで、合唱団の負担が大きくなってしまった。そこで芝居の部分はプロの役者に頼み、合唱団はできるだけ歌に専念出来るようにすることになった。経費はさらに嵩むがどうやらそのほうが無難である。

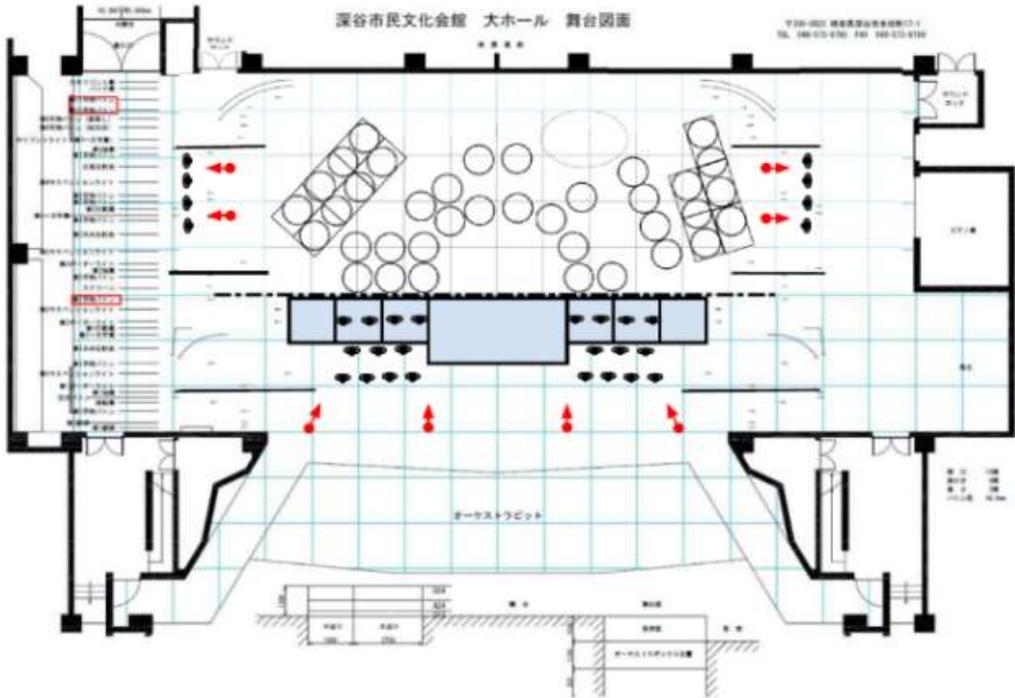
楽譜も出揃い、2020年10月からは本腰を入れ練習も動きはじめた。12月には、合唱だけでなく、立ち稽古に入ることになったが、まだ楽譜を離せない人もけっこう多かった。かくいう筆者もその仲間だった。制限だらけのやりにくい状況の中でも、合唱指揮者の磯野さんは、愚痴も漏らさず何事もなかったかのように淡々と練習を進める姿にみな安心してついていった。

ところが、収まらないコロナ禍で、練習会場が次々と使えなくなり、苦境に立たされた。こんな状態で本番に間に合うのか。マスク着用、体温測定、入室時の手指消毒、ソーシャルディスタンスの保持、30分ごとの換気休憩などに合わせ、施設ごとに異なる使用条件を遵守して練習を続けた。

演出を大きく変えねばならなかったことのひとつにとても心残りだったことがある。それは、たくさんの地元の子どもたちに歌ってもらう予定だった序曲のわらべうた『**あめのはな**』が、コロナ禍では実現困難と断念したことだった。子どもたちを巻き込むのはむずかしすぎる。渋沢栄一ゆかりの**深谷市立八基小学校**と**同市立幡羅中学校**が積極的な協力を約束してくれていただけに、ほんとうに

残念だった。

2020年9月、深谷市民文化会館大ホールのオーケストラピットはソーシャルディスタンスを確保すると、40人の演奏者が入りきれないことが判明した。オケを半分に減らす必要が生じたが、そのためには全曲を20人編成に編曲し直す作業が発生してしまう。これは納期と予算の関係からしても極めて困難なことだった。



オーケストラを舞台後方に配置

そこで、元曲のフルオーケストラ編成のままやることにし、オケをステージに乗せる決断をした。では、舞台のどこに乗せるか。もちろん歌手から指揮者が見える範囲でないと困る。舞台上手か下手に斜めに寄せるかなど、さまざまな案を検討した結果、けっきょく舞台の奥に横に並ぶ案に落ち着いた。

いわゆる演奏会形式のオペラに近いだろうが、決定的にちがうのは、

指揮者も奥にいて後ろ向きになっていることだ。しかし、合唱団やソリストが歌い演じるのは舞台手前である。指揮者を背にして歌わねばならない。これには正直困ってしまった。

これでほんとに歌えるのだろうか。そこで次善の策として、舞台前面に指揮者を映し出すモニターを置き、それを見ながら歌うことになった。モニターに大型のデジタルテレビを複数用意したが、通



書き割りの製作

舞台上で使う大小の道具類や書き割りの製作は、演出部の一大業務であった。筆者は演出部のメンバーではなかったが、人手が足りないと声をかけられるとどこへでも出向いて作業を手伝った。それがどうやら顧問に期待された仕事の一部らしい…。

最初に着手したのは、2020年の暮れも押し迫った12月29日、埼玉県上尾市の劇団埼玉稽古場をお借りしてのことだった。中でも一番大きな装置は「グミの木」だった。平九郎が自決した時に座した石「自刃岩」の傍らにあった木で、まるで血のように真っ赤な実をつけることから「平九郎グミ」と呼ばれている。

埼玉の堀越飛鳥さんはじめ団員の方々の協力を得てグミの木や自刃岩の骨組みを作った。プラスチックの段ボールを木の形に切ったあと新聞紙を貼り付け、彩色して赤い花を取り付けた。仕上げに裏を木材で補強して倒れないようにし、何日間か乾くまで放置してから仕上げた。



平九郎自刃の岩に彩色を施す

ほかにも障子、掛け軸、戦闘用垣盾(地上に並べて置く盾)などさまざまな道具類を作った。とくに女性陣が丁寧な仕事で仕上げた行燈の出来栄はすばらしいものだった。中にチラチラ揺れるLEDライトを仕込むと本物かと思紛うほどだった。



繊細な作業で行燈制作



劇団埼玉さんの稽古場をお借りして作業

ちなみに、書き割りとは舞台用語で、いわゆる背景の大道具のこと。書いて作ったものを、いくつかに割ることができることから「書き・割り」と呼ぶそうである。

ところで、今回の舞台装置の制作でとても助かったことがある。深谷市民文化会館から歩いて5分ほどのところに実行委員の北田健夫さんのマンションがあり、そこに資材や道具類を持ち込んで作業をしたり、そのまま保管場所にしたりと、とても便利に使わせていただけたのはありがたいことだった。

[Flute & Piccolo]	温井杏奈	長沼侑奈		
[Oboe]	高橋早紀	磯野実咲		
[Clarinet]	法正茉莉香	千葉友希		
[Fagotto]	洞谷美妃	北原亮司		
[Horn]	葛西 亮	村橋郁香	高須洋介	臼井佑香
[Trumpet]	麻生康平	中島めぐみ	神場梓	
[Trombone]	大浦時生	大泉茉弓	山田航平	
[Tuba]	牧優吾			
[Timpani]	石田湧次			
[Percussion]	土谷春歌	野村洋平		

深谷で渋沢平九郎をうたう会

出演メンバー

[Soprano]	岡崎理恵	佐藤裕子	杉田直美	田坂陽子	西村智子
	山根瑠璃子	菊地紗彩	加藤里歩子	米澤文音	
[Alto]	高谷綾子	立石圭子	菊地美恵子	福田奈穂美	
[Top Tenor]	榎田充哉	菅 忠博	正木一弘	米岡敏郎	
[Second Tenor]	小豆畑章	天野佑基	加藤良一	宮川千明	
[Bariton]	野口享治	大嶋 寛	菊地信行	北田健夫	杉山高一
	西塚和音	斉藤孝一			
[Bass]	金子哲夫	高田 充	林田一成	阿部大輔	



渋沢平九郎プロジェクト・オリジナル手ぬぐい



平九郎は急ぎ山を下るうちに三人の敵兵と遭遇してしまい、たった一人応戦せねばならなかった。

やはり婆さんの忠告は正しかった。

敵兵の詰問に、いざという時のために用意していた「三峯神社の神主の子です」という言い逃れを試みたが、そう簡単に聞き入れられるものではなかった。押し問答するうち、背中の荷物はなんだ、ここに出して見せよと迫られ、これ以上逃れることは叶わぬと覚悟し、

意を決して荷をほどき、中に隠し持っていた刀で素早く敵に斬りつけた。一瞬のうちに敵の片腕は切り落とされた。こうなった以上もはや斬り合うしかない。睨み合ううちに背後の敵に肩口を斬りつけられた。しかし、平九郎は血まみれになりながらも敵に向かっていった。敵は後ずさり、逃げながらも放った鉄砲が平九郎の太ももを貫通した。その場に倒れ込みながらも必死の形相で向かっ

